

福田恆存の戯曲における英文学受容の様相

著者	古田 高史
内容記述	筑波大学博士（学術）学位論文・平成24年7月25日 授与（甲第6296号）
発行年	2012
URL	http://hdl.handle.net/2241/119987

氏 名 (本籍)	古 ^{ふる} 田 ^た 高 ^{たか} 史 ^し (茨 城 県)		
学 位 の 種 類	博 士 (学 術)		
学 位 記 番 号	博 甲 第 6296 号		
学位授与年月日	平成 24 年 7 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科		
学 位 論 文 題 目	福田恆存の戯曲における英文学受容の様相		
主 査	筑波大学教授	Ph.D.	今 泉 容 子
副 査	筑波大学教授	博士 (文学)	新 保 邦 寛
副 査	筑波大学准教授	博士 (学術)	平 石 典 子

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、1948～1957年に発表された福田恆存の戯曲作品の分析を通して、福田戯曲において「英文学作品」が重要な役割を果たしていることを明らかにすると同時に、福田がどのように「英文学」を受容したかを分析することである。

福田は従来、文芸・政治・社会の「評論」に取り組んだ者として評価されてきた。しかし、同じ時期に、彼は数ある戯曲作品も発表しており、これらの福田戯曲の研究は——発表当時に注目を集めたことはあったものの——十分な考察の対象とされてこなかった。本論文は、こうした「戯曲」作家としての福田恆存に焦点をあてて、福田研究における空隙を埋めようとする。

本論文の構成は以下のとおりである。

序章

第1章 福田戯曲の出発点－「饒舌」と「下敷」－

第2章 『放送劇チャトレイ夫人の恋人』－「自意識の悪循環」という認識－

第3章 『龍を撫でた男』と『カクテル・パーティー』

第4章 『現代の英雄』と『明智光秀』－『マクベス』受容－

第5章 『ハムレット』の翻訳と詩劇『崖のうへ』、『明暗』

結章

序章では、先行研究のなかに本論文を位置づけた上で、本論文の目的を明らかにしている。

第1章では、福田戯曲の出発点と同時代的背景の提示を行っている。新劇史的に見れば、福田は岸田国士の後継者と見ることができる点を明らかにして、『最後の切札』（1948年）を具体的に分析している。福田は岸田が提唱した文学の立体運動「雲の会」の創立メンバーであり、彼の処女作『キティ台風』は昭和25年に岸田の推薦によって文学座で初演された。しかし同時に、岸田がいうフランス心理主義戯曲としての演劇を打破しようとしたことが検証されている。『キティ台風』（1950年）においては、「せりふ」をめぐる試みとして、「饒舌」を用いたことが考察される。

こうして福田恆存の「言葉へのこだわり」が明らかにされると同時に、本論文がもっとも重要な概念とみなす「下敷」の意味が定義される。福田戯曲はシェイクスピアやD. H. ロレンスやT. S. エリオットなどの英

文学作品を「下敷」にして創造されている、という仮説が提示され、第2章以下に福田戯曲作品をひとつずつ詳細に分析し、それぞれの作品が英文学作品をどのように「下敷」として使っているかを分析することが述べられる。さらに、「下敷」にされた英文学作品は、福田によってどのように受容され、また変容されて福田独自の戯曲世界がつくりあげられていくかを実証することが述べられる。

第2章では、さっそく「下敷」の検証が行われ、『放送劇 チャタレイ夫人の恋人』(1952年)がD.H. ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』(1928年)をどのように「下敷」にしたうえで書き換えているかが具体的に示される。これまで、ロレンスの影響は福田の「批評」に限定されて研究されてきた。しかも、ロレンスの『黙示録論』の影響に注目する研究ばかりだった。そうした状況のなか、本論文は福田「戯曲」の『放送劇 チャタレイ夫人の恋人』や『戯曲 武蔵野夫人』に注目して、それらの作品にロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』が与えた影響を検証しようとしたのである。とくに、福田が「自意識の悪循環」という発想をロレンスから読み取り、その発想を発展させていったことが明らかにされている。

第3章では、1952年発表の『龍を撫でた男』を、その「下敷」であるT.S. エリオットの『カクテル・パーティー』(1949年)が比較考察される。双方の作品に登場する精神科医(家則とライリー)は、表面的にはほかの登場人物たちをコントロールする存在のように見える。しかし、最後までコントロールする『カクテル・パーティー』のライリーと、最後には発狂してしまう『龍を撫でた男』の家則は、大きく異なる。この両者の差異が、「作因」の差異である。

福田の狙いは、宗教(キリスト教)の存在を認めることのできない「個人」の「孤独」を描くことであり、エリオットの『カクテル・パーティー』に「自己表現」の描写を求めたことが明らかにされている。

第4章では、シェイクスピアの『マクベス』が取り上げられ、どのように福田の『現代の英雄』(1952年)と『明智光秀』(1957年)の「下敷」になったかが論じられる。福田は『マクベス』における魔女の予言の「両義語」を重視し、『マクベス』を「両義性」の積み重ねにより展開していく戯曲だと理解した、と本論文は述べる。そして、予言の「言葉」に翻弄される主人公が福田戯曲に描き出されることが指摘され、福田の創作における「せりふ」の重視につながっていく、と結論づけられている。

第5章では、第4章の結論をべつの戯曲作品にも適用できることが論証される。具体的には、シェイクスピアの『ハムレット』と、福田戯曲『崖のうへ』(1955年)および『明暗』(1956年)を比較分析するなか、に、「せりふ」をめぐる福田の取り組みが解明されるのである。

従来の福田恆存研究においては、福田の評論(平和論、国語問題、教育問題)やシェイクスピアの翻訳などが取り上げられ、戯曲である『崖のうへ』や『明暗』は見落とされがちであった。これらの作品を具体的に分析することによって、「せりふ」を「行動の休止ではなく、行動そのもの」ととらえていた福田が、「せりふ」に対する独特な試みを行っていたことが解明されている。

結章は、第1章から第5章までの成果をまとめたものである。さらに今後の課題として、分析対象を福田恆存以外の文人の戯曲へと広げること、福田戯曲の創作方法に英文学が与えた影響をさらに解明すること、本論文で取り上げなかった福田戯曲を研究にふくめること、という3点が挙げられている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、福田恆存の「戯曲」を取り上げ、その特色を「英文学の受容」という視点から解明しようとした意欲的な論文である。従来の福田恆存研究は、その大半が福田の「批評」を研究対象としてきたため、福田戯曲の研究はほとんど存在しない。そうした福田研究の間隙を埋めるものとして、本論文は位置づけられる。

たしかに福田恆存は、シェイクスピアの翻訳家として今日も注目される人である。シェイクスピア翻訳家

としてだけでなく、批評家（文学・国語・教育問題の批評家）としても重視され、研究が進んでいる。しかし、翻訳家・批評家としての福田像に欠如しているものがあり、それが戯曲家としての福田像であることに着目したことから、本論文は出発している。福田戯曲は、研究対象としてあまり注目されることがなかった。

福田戯曲に着目した本論文は、福田戯曲の特徴としてある重要な点を提示している。それは、福田戯曲が英文学品を「下敷」にしている、という点である。福田戯曲の分析を行うことは、「下敷」にされた英文学作品との比較研究を行うことになる。したがって本論文は、福田戯曲の代表作を取り上げ、そのひとつひとつを「下敷」にされた英文学作品と照合させながら、粘り強い分析を展開している。こうして本論文は、福田研究の新たな側面を切り拓くことに成功している。

具体例として、D.H. ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』を「下敷」にした戯曲『放送劇チャタレイ夫人の恋人』（1952年）、T.E. エリオットの『カクテル・パーティー』を「下敷」にした戯曲『龍を撫でた男』（1952年）、シェイクスピアの『マクベス』を「下敷」にした戯曲『現代の英雄』（1952年）と『明智光秀』（1957年）、シェイクスピアの『ハムレット』を「下敷」にした『崖のうへ』（1955年）と『明暗』（1956年）、という4セットを提示し、「せりふ」を引用しながら分析を行っている。「下敷」がどのように変容されて、福田独自の戯曲が創造されていったかが、明らかにされている。

本論文は、戦後日本の演劇（戯曲）において、英文学がどのように受容されていったかについてのケース・スタディとしても、貢献できるものとなっている。各章はいずれも、著者の粘り強い調査能力と考察力を示している。とくに、シェイクスピアの『マクベス』を「下敷」にした福田戯曲『現代の英雄』と『明智光秀』の分析は、「せりふ」と「人物造形」に密着した分析が展開され、日本文学研究や比較文学研究にとって有益な成果が提示されているだけでなく、英文学研究にとっても貢献度の高い考察となっている。

以上のように、本論文は力作ではあるが、問題がないわけではない。第一の問題として指摘できるのは、福田自身の言葉に沿う形で論考が展開されるため、福田の言説の見取り図としてはよくまとまっているものの、「同時代の劇作家」のなかで福田戯曲がどのように位置づけられるかが不鮮明であること。これは、著者も結章で今後の課題としているように、福田恒存の「戯曲」を解明するにあたって、ぜひ取り組むべき課題であろう。

つぎに指摘できる問題点は、本論文の章立てについてである。論文全体の拠り所となる「下敷」という枠組みが、「第1章」で提示され、定義されている。この章は枠組みを提示する役割をになうため、つづく「第2～5章」と同等に並べるには問題が残る。「第2～5章」は各論であり、「第1章」の実証的考察であるためである。

とはいえ、このような斬新な課題への取り組みは前例がないだけに、福田戯曲を「英文学受容」という視点から解明した本論文の成果は、極めて優れたものであると判断される。

平成24年5月29日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。